

高山林次郎（樗牛）等著『明治三十年史』と 近代アジア世界に与えた影響

佐藤 厚*

1 問題の所在

1898年（明治31）4月、東京で、東京遷都三十年を記念する奠都三十年祭が行われた。同年、雑誌『太陽』を発行していた出版社・博文館は、『太陽』増刊号として『奠都三十年』を刊行した。この中に、高山林次郎（樗牛）を始めとする12人の論客が明治三十年間の思想、政治、軍事、外交、宗教などの歴史を叙述した『明治三十年史』（以下本書）が収録されていた。本書は日本では著名な作品ではないが、中国語に翻訳されて近代アジア世界に大きな影響を与えた。

1902年（明治35）、近代中国の変法運動の中心人物・康有為の弟子であり、当時早稲田大学に留学していた羅普は、本書を中国語に翻訳し『日本維新三十年史』と改題して刊行した。これは当時、アジアで唯一近代化に成功した日本の近代史を叙述したものとして中国国内で読まれ、少年時代の胡適もこれを読んだという。さらに、これは中国の周辺地域にも影響を与えた。日露戦争を経て日本の保護国となった朝鮮では1906年（明治39）、『皇城新聞』に中国語訳からの翻訳を連載し近代化の模範とした。また清仏戦争後、フランス統治下におかれたベトナムでも、独立運動家たちが中国語訳を読み近代化に成功した日本を知った。

*専修大学ネットワーク情報学部特任教授

このように中国語訳された本書はアジア世界において近代化の模範の役割を果たしたのであった。日本の著作が中国語に翻訳されたものは1900年前後から1937年までで2602種を数える¹。しかし、中国、朝鮮、ベトナムと広範囲にわたり、その流通の後を辿れるものは多くはない。その意味で本書の歴史的意義は大きく、研究する価値もあると考えられる。本書の先行研究は、言及というレベルではいくつかあるが、専門的なものは、管見では韓国のイ・イエアン [2014]、同 [2015] しか存在していない²。ただ、それらにおいては本書の刊行、翻訳、流通は簡単な紹介に止まっている。そこで本稿は、本書の日本における刊行、中国における翻訳、そして朝鮮、ベトナムへの影響について整理することを目的とする。

2 『明治三十年史』の刊行経緯と内容

(1) 刊行経緯

1898年(明治31)4月10日、東京で奠都三十年祭が挙行された。これは明治2年に東京が首都に定められてから三十年を記念する行事で、会長を岡部長職・東京府知事、副会長を渋沢栄一・東京商業会議所会頭が務めた。当日は、二重橋前の祝賀式場に明治天皇の行幸啓を仰ぎ、各新聞雑誌社の発起によって寄付金を募って祝賀が行われた。余興として大名行列、奥女中行列、落語家、新聞社、長唄組合、料理屋などの自家広告の仮装行列および山車が出た。地方からの上京者は10万人、東海道線は当日に6万数千人を、日本鉄道は三日間に3万7千人を運び込んだという³。ここから、この祭典が盛大な行事であったことがわかる。

この時、総合雑誌『太陽』⁴を創刊していた博文館は、その臨時増刊号として『奠都三十年』を刊行した。「緒言」では刊行の目的を「奠都の由来と、祝賀会盛典の顛末を叙し、併せて既往三十年間、帝国百般の事物、変遷変化の大勢を觀察し、其の梗概を編述して、以て国勢發達の形勢を詳

にし、東京市民奠都祝賀会の挙あるもの、
 洵に偶然ならざる所以を明らかにせんと欲
 す」⁵と述べている。構成は、写真銅版、
 緒言、奠都の由来、奠都三十年祝賀会、祝
 賀会の景況、奠都詞叢、奠都彙聞、奠都談
 叢（名家訪問録）と続き、最後に位置する
 のが『明治三十年史』である。

（2）内容

『明治三十年史』は明治三十年間の日本
 の発展の様相について、『太陽』の記者を
 中心とした12人の論客が論じたものである。
 以下、各編の題目、著者、内容の概略を掲げる。

第1編「総論：明治思想の変遷」の著者は高山林次郎（樗牛）（1871-1902）
 である。高山は東京大学で哲学を学ぶと同時に「滝口入道」により文才も
 認められた新進気鋭の文芸評論家、思想家であり、当時は『太陽』の主筆
 を務めていた。高山は本編の結論で、明治思想を四期に分け図とともに整
 理している⁶。第一には明治初年から6、7年まで。これは皇学の幼稚な
 保守的的反動が、幼稚ながら強大な欧化主義に対立した時代。第二には明治
 7年から約明治20年前後まで。これは民選議員主唱者の政体改革論に対し
 て保守論者がドイツ流の国家主義論をもって反対した時代。第三には明治
 20年前後の国粹保存主義の時代とそれに伴う日本思想と外国思想との対立
 が現れた時代。そして第四には明治30年からの日本主義の時代である。高
 山は日本主義を「日本主義とは日本国民の守るべき主義と云ふ義なり。精
 しくは国体民性に基き、皇祖建国の丕図を体認して其国家的大理想と国民
 的大抱負とを実現せむことを期する所の実践道德の主義を謂ふ。」⁷と定義
 する。これはこの時期の高山の中心思想であり、それが本書の根幹と言え



図1 『明治三十年史』
 (国会図書館近代デジタルライブラリ)

るであろう。

第2編「政治」の著者・鳥谷部銑太郎（1865-1908）は、号は春汀。ジャーナリストで『太陽』で人物評論を担当していた。本編の内容は、第1章 改革時代、第2章 民権発達時代、第3章 立憲時代からなる。

第3編「軍事」の著者・奥村信太郎（1875-1951）は、1897年博文館編集局に入社した後、1901年に大阪毎日新聞社に入社、のちに社長を務めた。本編の内容は、第1章 陸軍、第2章 海軍、第3章 戦役、からなる。

第4編「外交」の著者・松井広吉（1866-1937）は、号は柏軒、新聞記者である。博文館の大橋新太郎と友人で、後に越佐毎日新聞の主筆を務めた。本編の内容は、緒言、第1章 草創政府の国際的地位、第2章 秘露国との交渉、第3章 千島と樺太の交換、第4章 朝鮮交渉始末、第5章 条約の改正、第6章 日清の交渉、第7章 日清戦役中の外交、第8章 三国干涉、遼東還付からなる。

第5編「財政」の著者・森一兵（生没年不詳）は、ジャーナリストで『商家書翰文』（博文館、1898）、『会社銀行実務案内』（博文館、1899）などの著作がある。後に名古屋新聞社長を務めた。本編の内容は、緒言、初紀 明治初年の財政、上紀 百度整備の端緒、中紀 財政整理の時代、近紀 日清戦争前後の財政からなる。

第6編「司法」の著者・宮川大寿（生没年不詳）は、法律学者で『刑事訴訟法正解』（博文館、1890）、『日本民法正解』（博文館、1890）などの著作がある。本編の内容は、第1 維新前後の司法権、第2 司法省設置前の裁判所、第3 江藤新平と裁判権、第4 大審院の創設、第5 刑律の変遷と法典の発布、第6 法律学校及び代言人からなる。

第7編「宗教」の著者・姉崎正治（1873-1949）は評論家・宗教学者で、東京帝国大学哲学科に学び、後に同大学教授となって日本の宗教学研究の礎を築いた。高山樗牛と交友を結び、高山の死後、笹川臨風とともに『樗牛全集』を編集した。本編の内容は、序論：1 日本宗教史の特質、建国以

来の宗教，2 明治宗教の前駆として徳川時代の宗教，本論：1 開端，2 祭政一致，政教一致，3 仏教の蘇生，蠢動，4 外国思想，基督教の勃興，5 外国心酔の波瀾，仏教徒の覚醒，6 活気ある宗教界，教育宗教の衝突問題，7 神道の状態，其腐敗，8 仏教界の擾乱，9 宗教の研究，国民の自覚，新宗教の希望，10 新運動，決論からなる。

第8編「教育」の著者・長谷川誠也（1876-1940）は，号は天溪，文芸評論家で『太陽』の編集に従事した。本編の内容は，第1節 維新以前の教育一斑，第2節 維新当初の教育，第3節 学制の頒布，第4節 高等教育の基礎，第5節 教育令の発布，第6節 徳育の奨励，第7節 気質の鍛錬，第8節 教育勅語の発布，第9節 教育と宗教との衝突，第10節 世界主義と国家主義との衝突，第11節 日清戦争の影響，第12節 戦後の教育界，第13節 最近教育界の状況，第14節 教育学風の変遷からなる。

第9編「文学」の著者・柳井録太郎（生没年不詳）は『太陽』記者で、『征清詩集』（博文館，1895年）という著作もある。本編の内容は，1 総論，2 小説，3 脚本，4 新体詩からなる。

第10編「交通」の著者・坪谷善四郎（1862-1949）は，号は水哉。東京専門学校（現・早稲田大学）在学中に博文館に入社。『太陽』の創刊にあたり初代主筆を務めた。のち編集局長を経て1918年に取締役就任した。本編の内容は，交通機関の性質，第1章 道路の変遷，第2章 鉄道の発達，第3章 海運の発達，第4章 郵便の発達，第5章 電信及電話の発達からなる。

第11編「産業」の著者・塩島仁吉（生没年不詳）は，詳しいことはわからないが、『日清戦史』（経済雑誌社，1894），『鼎軒田口先生伝』（経済雑誌社，1912）などの著作があることから作家と思われる。本編の内容は，第1章 総説，第2章 農業，第3章 製造業，第4章 商業，第5章 鉱業，第6章 森林，第7章 水産業からなる。

第12編「社会」の著者・岸上操（1860-1907）は，号は質軒。大蔵省入

省後，博文館に入り編輯人を務める。本編の内容は，第1章 破壊時代，第2章 破壊時代の半面，第3章 欧化時代，第4章 建設時代の関門からなる。

附録「明治三十年間国勢一覧」の編者・伊東祐毅（1861-1921）は，統計学者，官吏である。統計院に入り，のちアメリカに留学。さらにハンガリーの万国統計会議に日本代表として出席。帰国後「世界年鑑」を出版。大正3年に佐賀図書館長を務めた。内容は，人口，政治，外交，軍事，財政，司法，教育，文芸，宗教，交通，産業，社会に関する統計表からなる。

以上、『明治三十年史』は明治30年間の日本の12の分野の歴史であるが，ただの記録にとどまるのではなく，高山の日本主義が根底にあり，その背景には，日清戦争の勝利，三国干渉への反発という対外関係にともなって惹起されたナショナリズムがある。

3 中国語訳『日本維新三十年史』

(1) 翻訳の背景：梁啓超の活動と日本書籍の翻訳

1902年（光緒28，明治35）3月，『明治三十年史』を翻訳し改題した『日本維新三十年史』が広智書局（上海）から刊行された。筆者が参照したテキストは韓国中央図書館所蔵の第三版（1903年刊行）である。

訳者は羅普（1876-1949），序文の撰者は趙必振（1873-1956）である。この二人はともに梁啓超（1873-1929）が日本に亡命している時に，その活動に参加した人たちである。翻訳の背景を知るためには，まず



図2 『日本維新三十年史』
（韓国中央図書館所蔵）

1900年前後の中国の政治、思想界の動き、その中での梁啓超の活動について知る必要がある。

1895年（光緒21）、日清戦争に敗れた清国では、1898年（光緒24）に光緒帝のもとで康有為（1858-1927）、梁啓超らが、議会政治と立憲君主制の樹立をめざして変法運動を開始した。しかし西太后により弾圧されて運動は挫折した（戊戌の政変）。その結果、康有為、梁啓超は日本に亡命して活動することになる。この中、梁啓超は1912年まで日本に滞在し、横浜で『清議報』を発行したほか、日本の著述を通して広い分野での西洋文明を学んだ。その成果は『新民叢報』、『新小説』などの形で刊行された。また、同時に多数の日本の書籍を中国語に翻訳した。翻訳に際して、梁啓超は海外華僑からの資金をもとに上海に広智書局を設立し翻訳書刊行の拠点とした⁸。

こうした梁啓超の日本の学術の摂取の中で『明治三十年史』は翻訳された。梁啓超は、日本の歴史の中で注目すべき時代を二つ挙げる。一つは明治時代史であり、それは明治日本の進歩の原因を知るためである。もう一つは明治時代の基礎となる幕末史である⁹。ここから明治時代の様々な分野について詳細な歴史が整理されている『明治三十年史』は、梁啓超が求める明治日本の発展を理解する格好の書物となったであろう。彼は『明治三十年史』の翻訳『日本維新三十年史』を「近史の中で我が学界に最適なもの」と述べている¹⁰。

ちなみに『明治三十年史』の母体となった雑誌『太陽』と梁啓超には深い関係がある。吉田薫〔2008〕によれば、『太陽』の編集長である岸上質軒と梁啓超は互いに交流を持っていたという。このことも梁啓超が『明治三十年史』に注目した理由となっていたと思われる。

（2）訳者・羅普と序文の撰者・趙必振

続いて翻訳者である羅普と、序文の撰者である趙必振について簡単に紹

介する。

羅普¹¹は、字は孝高。広東省順徳の人。康有為が設立した万木草堂に入り、その弟子となる。1897年、22歳の時に日本に留学し、東京専門学校（現在の早稲田大学）に入学した。1898年、戊戌の政変が起こると亡命してきた梁啓超らが主宰する『清議報』、『新民叢報』の編集に従事するようになる。その時に『明治三十年史』、『政党論』、『二十年來の經濟狀況』などを書写した。そして梁啓超の影響を受けて民主革命に同情し、同門の十三人と連名で康有為と孫文との合作を訴え、1899年に興中会に加入した。1902年、『明治三十年史』の中国語訳である『日本維新三十年史』を刊行した。この時27歳であった。『早稲田大学百年史』によれば¹²、羅普は1902年（明治35）までに課程を得業した者に数えられていることから、在学中に翻訳を行ったものと考えられる。また羅普と梁啓超は共著で日本語の速成学習書『和文漢読法』を出版している。

序文の撰者の趙必振¹³は、一名は趙震、字は日生、筆名は趙振、民史氏等。湖南省常德の人。常德の徳山書院、長沙の湘水校経書院に学び、1900年の自立会運動に参加し、常德での組織活動にあたった。自立会とは、義和団の乱が発生した1900年、唐才常などの革命人士により結成された、武力で清朝の統治を覆す宗旨を持つ革命組織であり、各処で武力蜂起を試みたが失敗した。趙は自立会運動の失敗後、香港から日本に逃れ、梁啓超が進める『清議報』、『新民叢報』の編集にたずさわった。また、趙必振も羅普と同様、日本語の書籍の翻訳を行った。特に『二十世紀之怪物 帝國主義』（原著は幸徳秋水著、1902年、通雅書局より発行）、『近世社会主義』（原著は福井準造著、1902年、広智書局より発行）など社会主義関連の文献の翻訳を行なったほか、明治維新関係の文献『日本維新慷慨史』（原著は西村三郎『近古慷慨家列伝』、1902年、広智書局より発行）も翻訳している。その後「自立会紀実史料」「自立会人物考」の資料整理を行ない、中華人民共和国成立後は湖南省文史研究館館員をつとめた。

（3）中国語訳『日本維新三十年史』の刊行目的

前述したように、梁啓超は中国語訳『日本維新三十年史』を明治日本の歴史がわかる書物として高く評価していた。ここでは『日本維新三十年史』に記された序文、例言をもとに、より具体的に本書の特色をどのように考えたのかを探る。

1) 序文

ここでは趙必振が著した序文の内容を要約する¹⁴。趙必振はまず、新史氏すなわち梁啓超が説いたという¹⁵三つの歴史記述の方法を提示する。第一には神権の世の神代史、第二には君権の世の君史、第三には民権発達の世の民史という三つである。第一の神代史は万国共通であり、欧州にはアダムとエヴァ、日本には造化の三神、中国には三皇五帝があるが、これらは荒唐無稽な話である。続いて第二の君権の世になると、歴史は君史となり、歴史家は社会の事実ではなく君主にのみ注意するようになるという。今日の「新史学」を論ずる人は、「中国には歴史がない」というが、ないのではない。あるのは24の姓の家譜と年表だけなのだという。これは日本の歴史書も同様であり、昔の源光圀（水戸光圀）の『大日本史』なども新史氏の批判を受けるであろうと述べる。

続いて日本では明治維新になると歴史叙述の方法が変わったことを述べる。すなわち君主の歴史だけではなく社会のことを記すようになった。そこで挙げられているのは、田口卯吉『日本開化小史』¹⁶、福田久松『日本文明略史』、物集高見『日本文明史略』などである。それらは社会進化に意を注いでおり、これらは前代のように歴史書の書記の奴隷とはなっていない。そして世の中には、西洋主義、欧化主義、イギリス派の功利主義、フランス派の自由主義、ドイツ派の国家主義、実利主義、平民主義、国民主義、保守主義、進歩主義、模倣外物主義、崇拜外人主義、国粹保存主義

等があり、互いに衝突して国を挙げて潸然としている。そして進歩し改良し、旧来の習慣を廓清し、それにより万民のためになっている。そうした中、昔の君史の陋習を一洗して、社会に大いに関係のあるものを記すようになっていく。これを東アジアにおける歴史記述の第三である民史の始まりとする。

最近、日本人が『明治三十年史』を編纂した。これは収録の範囲に富み、編纂の記述が精密である。翻訳は羅孝高であり、文はすばらしく、近來の訳述家の最善本といえる。ただ、進化論に従うと世の中は変遷するものであるから、本書も後代から見ると、用済みになるかもしれない。

以上、趙必振の序文の内容は、『明治三十年史』を、梁啓超の提示する神史、君史、民史という歴史の叙述方式の発展の中で最も発達した段階である民史の一つとして位置づけ評価していた。

2) 例言

例言の作者は「広智書局編訳部謹誌」となっているが、広智書局の中心であった梁啓超が書いたものかもしれない。以下、一項ずつ拙訳により示す¹⁷。

第一は書物の紹介である。

一、この書はそもそも日本の明治三十年（筆者：正しくは三十一年）に日本人が維新記念の大祝典（維新三十年祝典）を東京で挙行了た時、博文館という東京第一の大書林があり、広く通人を招いて三十年來の国運の進歩を叙述させたものである。本が完成するとそれを国民に頒布して慶祝のしるしとした。その名を題して「明治三十年史」というが、いま特に訳述にあたり改めていまの名（日本維新三十年史）にした。

第二は中国で翻訳された日本の歴史書の中での本書の特徴を述べる。

一、近年、我が国で翻訳され普及している日本史に数種がある。しかしそのほとんどは政治に詳しくその他のことは簡略である。これは旧史の体裁の影響と思われる。〔それに対して〕この本は十二編からなる。一、学術思想史。二、政治史。三、軍政史。四、外交史。五、財政史。六、司法史。七、宗教史。八、教育史。九、文学史。十、交通史。十一、産業史。十二、風俗史。思うに〔これに〕国勢民情がすべて備わっている。かねて『資治通鑑』と『文献通考』の長がある。日本の歴史の中で良い本はこれに及ぶものがない。学者が、仮に〔本書の〕勉強を終えれば、日本の現今の文明の程度について、その本質に通じ、その用らきに達することができるようになる。

第三に黄遵憲（1848-1905）の『日本国志』と比較した本書の長所と述べる。

一、以前、黄遵憲が著わした『日本国志』があった。その体裁は本書ととても似ている。しかしその記録は明治十四年で終わっている。日本の近日の進歩の速さは一日千里である。故に十年間の変化は、前代に比べると百年千年になるであろう。あるいはそれ以上かもしれない。そうであれば、黄遵憲の書によって日本の今日の国情を求めようとするのは、『明史』によって中国の今日の時局を語るのと異ならない。かつ、甲国の人が乙国の事を言うとしても、〔これは〕必ず乙国の人から述べる詳細さと確実さに及ばない。黄遵憲は、学問は博通であり言葉の選択は雅であるが、日本維新の真の精神についてはいまだ十分に見ていない部分が多い。故に日本が〔今の〕日本になった理由を知りたいければ、この本を読まなければ〔理解〕できない。

第四に本書の構成と訳者について述べる。

一、この書物の原本は十二編である。日本の著名なる博士である学士・

高山林次郎君、姉崎正治君など十二人が分纂した。人顯一門故、その紀載の詳博さ、議論の精新さはまさに「山陰道上、応接に暇なし」（色々なものが次々と起こり、一つ一つに対応しきれない）の観がある。

訳者は羅君孝高である。〔彼は〕丁酉年〔1897〕から日本に行き東京専門学校に留学した。深く日本語に通じ、かつその政治・学問・風俗に通じているため、よくある経験の浅い文章家のものとは異なる。読者よ。細かく調べ、自からこれを判断してほしい。

以上、例言に記された『日本維新三十年史』の価値は次の五点である。

第一に、日本史の中で政治史に止まらず多くの分野にわたる書物であること。第二に、日本の最新の情報を収録していること。第三に、日本人（日本人）の著作であること。第四に、日本の優秀な人々の著作であること。第五に、翻訳が優れていること、である。

（3）原著との比較

続いて『明治三十年史』と中国語訳『日本維新三十年史』とを比較し、その特徴を指摘する。全文にわたる内容の比較は後日の課題とし、ここでは内容構成と冒頭部の比較に止める。巻末に掲げた〈資料1〉「『明治三十年史』原文翻訳構成対照表」は日本語の内容構成に対する中国語訳、韓国語訳を対照したものであるが、ここでは日本語と中国語訳との関係を見る。

1) 構成

中国語訳は全体が6巻からなる。第1巻の前半には、序文（趙必振）、例言、目録（目次）があり、これは原著には存在しない。続いて原著の「第1編総論：明治思想の変遷」が第1「學術思想史」に、第2「政治」が第2「政治史」に改題されている。第2巻の内容は、原著の第3「軍事」が

第3「軍政史」に、原著の第4「外交」が第4「外交史」に改題されている。第3巻の内容は、原著の第5「財政」が第5「財政史」に、原著の第6「司法」が第6「司法史」に、原著の第7「宗教」が第7「宗教史」に改題されている。第4巻の内容は、原著の第8「教育」が第8「教育史」に、第9「文学」が第9「文学史」に、第10「交通」が第10「交通史」に改題されている。第5巻の内容は、原著の第11「産業」が第11「産業史」に、原著の第12「社会」が第12「風俗史」に改題されている。第6巻の内容は、原著の「附録 明治三十年間国勢一覧」が「三十年間国勢進歩表」と改題して収録されている。

以上からわかるのは編名について原著にはない「史」という文字が付されていることである。これは訳者・羅普が本書を歴史書と捉えたことによると考えられる。また「第1編総論：明治思想史の変遷」が第1「学術思想史」に変更されている理由は次に考察する。

2) 冒頭部分の比較：

続いて冒頭部分を比較する。中国語訳は基本的に原文に忠実に翻訳されているが、冒頭の部分が大きく異なっている。巻末の〈資料2〉「原文翻訳冒頭部対照表」を見ていただきたい。まず高山林次郎の「総論：明治思想の変遷」の冒頭は次のようになっている。

明治初年以來三十年間に於ける最近の歴史を述ぶるに先ちて、それが根柢となれる国民思想の推移を尋ねむに、

この中、「最近の歴史」とは第二編の政治編以下を指し、「国民思想の推移」が第一編を指す。すなわち具体的な歴史展開の根底に思想があることを説いている。この部分に対応する中国語訳は次のように大きく異なっている。拙訳で示す。

学述^{ママ}があって後に思想があり、思想があって後に事業がある。一人の人間がそうであるように一つの国も同様である。故に国家の治蹟とは、実に国民の学述の反射であり、その思想の外表なのである。日本は三十年來、銳意に維新をなし、著者と文章制度を進歩させ爛然たるさまを觀ることが出来る。しかし、それがこのようになった理由を述るならば、〔そこには〕自ら一つの表面には現れない流れ（暗潮）が、その間を流れて左右していたのである。世を論ずる者が、かりに深く觀察してそれを得ることがあれば、その一切の進歩の原を求めることは〔『書経』にいう〕「網が綱に在り、〔條有りて紊（みだ）れざるがごとし〕」のように、連関していることがわかるであろう。

日本語と比べると意味はほぼ同じであるが、格調高い文章になっている。冒頭に「学述」とあるが、これは「學術」と同じものと考えられる。すなわち学ばれる學術があり、それにより思想が形成され、それにより目に見える事業がなされると解釈できる。このような目に見えない學術、思想を重視するところに、この編の眼目があり、羅普が、原題の「明治思想の変遷」を「學術思想史」と変更した理由があると思われる。ちなみに「學術思想」という語に関して、梁啓超は「論中国學術思想變遷之大勢」（1902年）の中で次のように述べる。

學術思想が一国にあるのは、人が精神を持つと同じである。そして政事、法律、風俗、及び歴史上の種種の現象は、その形質である。故にその国が文明か野蛮か（文野）、強弱の程度はどうかを規ようとするならば、必ず學術思想においてこれを求めるべきである。（學術思想之在一國、猶人之有精神也。而政事法律風俗及歷史上種種之現象、則其形質也。故欲規其國文野強弱之程度如何、必於學術思想焉求之。）¹⁸

ここでは学術と思想とを分けて解釈はしていないが、「学術思想」とは人間では精神に相当し、あらゆる現象の根底にあるもので重要なものであると考えており、羅普の文と通じるものがあると考えられる。

（５）影響

中国語訳『日本維新三十年史』は、日本の近代化の歴史を記したものとして清末の知識人たちに歓迎された。筆者が参照したのは1903年に刊行された第三版であるが、その中、第一巻の末尾には「注意」として、本書が刊行後すぐに売り切れになったこと¹⁹、さらに海賊版が出現したために特別な印を押印することにより真贋を見分けられるようにしたこと²⁰が記されている。

さらに本書が具体的に読まれていた証拠として近代中国の学者、思想家、外交官であった胡適（1891-1962）の少年時代の例をあげてみたい。1904年、安徽省から上海に出た胡適（当時14歳）は梅溪学堂に入学し、国文、数学、英文の三課目を学んだ。非常に優秀であった胡適だったが、ある日、作文の時間に「日本が強い理由を求む」という題を課され、当惑したという。そこで次兄に相談したところ、次兄は自分の持っている本を譲ってくれた。彼は、その中にあった『明治維新三十年史』、『壬寅新民叢報彙編』を参考にして作文を書き上げたという。このとき次兄からもらった書物はすべて洋装本であり、梁啓超一派の著書が大部分を占めており、胡適が梁啓超の思想に傾倒するきっかけとなったという²¹。

この中、『明治維新三十年史』とは『日本維新三十年史』のことであり、『壬寅新民叢報彙編』とは梁啓超が刊行していた雑誌『新民叢報』である。ここから当時における本書の普及ぶりを窺うことができよう。

4 中国周辺地域への影響

中国語訳『日本維新三十年史』は中国周辺地域にも伝播し影響を与えた。ここでは朝鮮とベトナムへの影響を紹介する。

(1) 朝鮮

1) 当時の状況

朝鮮時代は1392年に始まるが、16世紀末の豊臣秀吉の朝鮮侵略により打撃を受け、さらに17世紀初めには清の侵攻を受ける。そして1636年、丙子胡乱の結果、朝鮮は清国に家臣の礼をとることになり、それが約250年間続いた。1876年、日本の開国要求を受けて開国した朝鮮であったが、宗主権を維持しようとする清、新興勢力の日本との狭間に置かれ、日清戦争の結果、日本の影響が決定的となった。そして1897年、中国の影響を脱して独立国である大韓帝国となった。しかし続いて大韓帝国にロシアの影響が高まると、ロシアと日本との対立が深まり日露戦争が起こった。戦争に勝利した日本は大韓帝国に統監府を置き、間接統治を始めた。その中で朝鮮の知識人は日本を模範とした近代化を模索するようになる。その中では新聞を刊行して民衆の啓蒙に努めた。

当時の新聞は国民の愛国心を高揚させるため、外国の侵入を撃退した国内外の英雄たちの伝記を連載した。また独立・革命・革新、そして亡国に対する外国の歴史に関心を持った。中でも歴史の部分は梁啓超が関連する著作が多く、『皇城新聞』には本論で扱う「日本維新三十年史」(1906年掲載)のほか、「読越南亡国史」(1906年掲載)、「読意大利建国三傑伝」(1906年掲載)、「斯巴達小志」(1907年掲載)、「滅国新法論」(1907年掲載)を掲載し、『大韓毎日申報』は「波蘭末年戦史」(1905年掲載)、「世界歴史」(1910年掲載)などを連載した²²。このように朝鮮では梁啓超を通して日本の近

代化の具体的な歴史を知ることに
なったのである。

2) 『皇城新聞』の連載

1906年（光武10, 明治39）4月
30日、『皇城新聞』²³は「日本維新
三十年史」の連載を始めた。その
目的は歴史を学ぶことにより近代
化の模範とすることであった。翻

訳者などは不明である。連載の冒頭に「歴史宜読」という一文が掲げられ
る。以下に拙訳を掲げる。

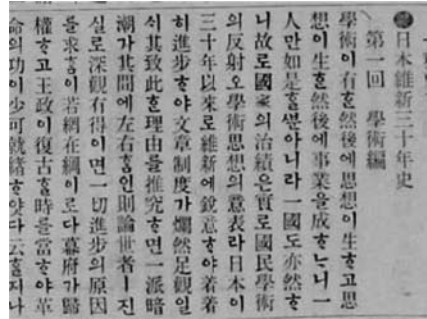


図3 『皇城新聞』「日本維新三十年史」

古今天下に人がいれば社会があり，社会があれば国があり，国があれば歴史があり，〔それにより〕社会人類が文明か野蛮か（文野）と国家政治の得失とが，はっきりとわかる（瞭如指掌）。ここから諸国の博学の士たちは歴史学を専攻する者が多いが，自己の学術だけを詳しく調べるだけではなく，自国〔の社会が〕文明か野蛮か（文野），〔国家の〕得失の大影響，大裨益をこれに従って見なければならぬ。そうであれば歴史学は世道公益にとって果していかなるものであろうか。今，この日本維新三十年史は，明治以後の諸般の実蹟であるが，我が国の現時代に講究しなければならない模範であるため，全貌を訳述すること左の如きである。僉君子に供覧するので愛読されることを望む。（古今天下에 人이 有ㅎ. 먼 社会가 有ㅎ. 고 社会가 有ㅎ. 먼 国이 有ㅎ. 고 国이 有ㅎ. 먼 歴史가 有ㅎ. 야 社会人類의 文野와 国家政治의 得失이 瞭如指掌이라 是以로 列邦博学士들이 歴史学을 専攻者 | 多ㅎ. 야 自己의 学術에만 精益求精ㅎ. ㅡ入分 아니라 自国에 文野得失의 大影響 大裨益을 從此可見ㅎ. ㅡ. 니 然則歴史学이 世道公益의 果何如

哉오 今此日本維新三十年史ハ . . . 明治以後에 諸般實蹟이니 我國現時
 代에 不得不講究模範이기로 全貌를 記述如左 ㅎ . 와 僉君子의게 供覽
 ㅎ . 오니 愛讀 ㅎ . 심을 務望 ㅎ . ㄱ)

このように『日本維新三十年史』について、「我が国の現時代に講究しなければならぬ模範すなわち近代化の模範」と捉えていることがわかる。

連載は4月30日から12月31日まで通算206回行われた。内容は巻末<資料1>にあるように、中国語訳の完訳ではなく第八章「教育史」の途中で終わっている。また、編名に注意すると、第1編「學術思想史」が「學術編」とあるように、第4編までは中国語訳に付されていた「史」という文字が無くなる。ただ第5編「財政史」から第8編「教育史」までは中国語訳通りである。

翻訳のスタイルは、巻末<資料2>にあるように、中国語（漢文）に助詞などを付けた、懸吐と呼ばれる伝統的な漢文の読み方で行われている。翻訳はほぼ中国語に準拠している。

韓国語訳『日本維新三十年史』は、一般の知識界だけではなく朝鮮の仏教界も注目していた。朝鮮仏教界の雑誌『海東仏報』（1914年）は「日本維新三十年史中訳出」として『明治三十年史』の姉崎正治「宗教史」の部分だけを訳出している。

（2）ベトナム

19世紀半ば、ベトナムはフランスの侵略を受けた。1858年に仏越戦争で敗れコーチシナ東部を領有され、1883年には全ベトナムがフランスの保護国となった。さらに翌年1884年の清仏戦争の結果、清はベトナムの宗主権を放棄し、フランスの支配が確定した。それに対してファン・ボイ・チャウ（潘佩珠1867-1940）ら独立を目指す志士たちはフランス支配からの脱却のための方策を探るが、その際に参考としたのは中国からもたらされた

「新書」とよばれる最新の学術をおさめた書物であった。それらの多くは梁啓超らにより刊行されたものであったが、その中に『日本維新三十年史』も含まれていた。

白石昌也 [1993: 133-134] は、ファン・ボイ・チャウと同時代の知識人フィン・トゥク・カンが1904年前後のことを回想した自伝を引いている。

この頃中国では日清戦争 [1894-94], 戊戌政変 [1898], 庚子連兵 [1900年の自立軍蜂起と興中会惠州蜂起] などの諸事件が起こった後であって, [ベトナムの] 多くの士夫が覚醒し, 西学を全国に広める運動を起こした。「新書」や「新報」, とりわけ康 [有為]・梁 [啓超] の著作が徐々に我が国にも入り, また日露戦争の報も伝わってきた。自分や同郷 [クアンナム省] のファン・チュ・チンは, フェでタン・チョン・フエやダオ・グエン・フォから蔵書を借り受け, 新たな情報や思想に接した。その時に眼を通した書籍には, 『戊戌政変』, 『中国魂』, 『日本維新史』, 『新民叢報』などがあつた。

この中のファン・チュ・チン（潘周楨1872-1926）が借り受けた『日本維新史』は『日本維新三十年史』である。白石 [1993: 137] はここに注釈を付けて次のように述べている。

羅孝高訳『日本維新三十年史』は東洋文庫に保存されている。またフランス国立文書館旧植民地省分館 IC-GG-20225, "Saisie de 3 brochures sur la Guerre russo-japonaise chez la négociant chinois M.Ap-Seng, 1907" 中に仏印当局の押収した原本が保管されている。遅くとも1907年の時期までに, ベトナムに流入していたことが, これよりして明白である。

このように本書がベトナムで流通していたことは確実であるが、革命運動の中心人物であったファン・ボイ・チャウが本書を読んでいたかに関しては、羅景文 [2011: 71] はファン・ボイ・チャウの交友関係から考えてその可能性を排除できないと述べる。一方、グエン・ティエン・ルック [2015: 208] はファン・ボイ・チャウが「自身の著作の中で『日本維新史』について述べている」というが、筆者は現在、その証拠を見るに至っていない。

さて、ベトナムの独立運動家たちは民衆啓蒙のために日本の慶應義塾を模した東京義塾という学校を設立して教育を行った。その学校は教育班、鼓動班、著作班、財政班の四つに分かれていたが、その中の著作班において『日本維新三十年史』の訳出ならびに出版が行われていたという。玩章収 [1999: 264] は次のように述べる。

著作班は専門教材を編纂するとともに宣伝材料を作成する任務を負った。義塾は漢字と民族文字の字喃やローマ字によって数多くの冊子を印刷したが、同時に梁啓超の『中国魂』やその他の中国書『万国史記』『日本維新三十年史』なども参考書の形式で訳出して出版した。

この「訳出」がベトナム語への翻訳なのかなど、詳しいことはわからないが、いずれにせよ『日本維新三十年史』が東京義塾でも用いられ、独立を目指す学生たちが近代化した日本を学んでいたことは想像に難くない。

このように中国語訳『日本維新三十年史』は、梁啓超の他の著作とともに朝鮮、ベトナムに伝播し学ばれたのであった。

5 結語

本稿では、1898年（明治31）に刊行された雑誌『太陽』の別冊『奠都

三十年』に収録された高山林次郎ほか著『明治三十年史』について、その内容と中国語への翻訳、ならびに朝鮮、ベトナムといった近代アジア世界への影響を整理した。

ここで明らかになったことは、『明治三十年史』が、梁啓超らによる日本書籍の翻訳活動の中で中国語『日本維新三十年史』となることによってアジア地域のグローバルな文献になり、中国はもとより朝鮮、ベトナムに影響を与えたことである。

ではなぜ『明治三十年史』がこのように影響を与えたのであろうか。それは一言で言えばタイミングである。『明治三十年史』が刊行された1898(明治31年)は、日本が日清戦争に勝利し、同時に遼東半島の領有をめぐる三国干渉を受けてナショナリズムが高揚した時期である。この時に日本の発展の姿を振り返るものとして『明治三十年史』が著わされた。まさに同じ年に、清末の中国では変法運動の挫折にともない康有為、梁啓超が日本に亡命してきた。彼らは日本の成功、すなわち近代化の秘密を求めていた。そこに『明治三十年史』が登場したのである。彼らが本書に注目した理由はここにある。さらにこれは中国周辺の朝鮮、ベトナムでも同様であった。高山林次郎（樗牛）らは、これが中国語に翻訳されてアジア世界に流通するとは思ってもいなかったであろう。ここに文献の流通の面白さがあると思う。

<参考文献>

*参照の便のため、韓国語文献は日本語訳したものを示し、カッコ内に原著のハングル表記を行った。

1. 一次資料

高山林次郎等著『明治三十年史』（『太陽』別冊『奠都三十年』所収、博文館、1898年）

国立国会図書館近代デジタルライブラリ

羅普訳『日本維新三十年史』（広智書局、1902年）韓国中央図書館所蔵本

梁啓超『飲冰室合集』（中華書局、1989年）

『皇城新聞』(1906年)

2. 二次資料

(1) 単行本

・日本語文献

さねとう・けいしゅう [1960] 『中国人 日本留学史』(くろしお出版)

白石昌也 [1993] 『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボーイ・チャウの革命思想と対外認識』(巖南堂書店)

鈴木貞美編 [2001] 『雑誌『太陽』と国民文化の形成』(思文閣出版)

NGUYEN TIEN LUC [1999] 『ベトナム・日本関係史の研究: 明治維新から太平洋戦争まで』(広島大学博士論文): <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00031747>

・韓国語文献

キム・ヒョジョン [2000] 『近代韓国の国家思想』(哲学と現実社) [김효전 『근대 한국의 국가사상』(철학과 현실사)]

(2) 雑誌論文

・日本語文献

白石昌也 [1976] 「開明的知識人層の形成 - 20世紀初頭のベトナム」(『東南アジア研究』13-4)

沈国威 [2009] 「日本発近代知への接近 - 梁啓超の場合」(関西大学文化交渉学教育研究拠点『東アジア文化交渉研究』第2号)

グエン・ティエン・ルック [2015] 「19世紀末から20世紀初頭におけるベトナム知識人の日本の近代化についての認識」(海外シンポジウム報告書: 劉建輝編『日越交流における歴史, 社会, 文化の諸課題 [ベトナムシンポジウム 2013]』国際日本文化研究センター)

玩章収・川本邦衛訳 [1999] 「ヴェトナム近代における福澤諭吉と慶應義塾」(西川俊作・松崎欣一編『福澤諭吉論の百年』, 慶應義塾大学出版会) 初出は『三田評論』1989年

・中国語文献

張朋園 [1971] 「廣智書局(1901-1915) - 維新派文化事業機構之一」(中央研究院近代史研究所『近代史研究所集刊』第2期)

羅景文 [2011] 「東亞漢文化知識圈的流動與互動——以梁啟超與潘佩珠對西方思想家與日本維新人物的書寫為例」(『臺大歷史學報』第48期)

寇振鋒 [2008] 「梁啟超与日本综合杂志《太阳》」(『日本研究』2008年03期)

吉田薫 [2008] 「梁啟超与《太阳》杂志」(『學術研究』2008年第12期)

・韓国語文献

イ・イエアン [2014] 「大韓帝国期「維新」の政治学 - 概念の置換と「日本維新30年史」(翰林大学校『概念と疎通』14巻) [이예안 「대한제국기 '유신(維新)」의 정치학 -

개념의 치환과「일본유신 30 년사」—(한림대학교『개념과 소통』14 권))

— [2015]「高山林次郎ほか 11 名「日本維新三十年史」(翰林大学校『概念と疎通』14 卷)〔다카야마 린지로(高山林次郎)의 11 명,「일본유신 30 년사」〕(한림대학교『개념과 소통』15 권))

チェ・ヒョンウク [2009]「朝鮮の梁啓超受容と梁啓超の朝鮮に対する認識」(漢陽大学校東アジア文化研究所『東アジア文化研究』45 卷)〔최형욱「조선의 양계초(梁啓超) 수용과 양계초(梁啓超)의 조선에 대한 인식」(한양대학교동아시아문화연구소『동아시아문화연구』45 권)]

注

- 1 さねとう・けいしゅう [1960:291] 実藤恵秀『中訳日文书目録』(国際文化振興会, 1945 年)に収録されたものであるという。
- 2 イ・イエアン [2014] は, それ以前に『維新三十年史』に言及した研究文献としてキム・ヒョジョン [2000] を挙げている。またイ・イエアン [2015] は『維新三十年史』の解題と中国語, 韓国語への翻訳について簡潔に整理している。
- 3 『明治世相編年事典』(東京堂出版, 1965 年) pp.402-403
- 4 雑誌『太陽』は明治後半から大正時代にかけての代表的な言論雑誌として近年研究が進められている。代表的なものに鈴木貞美編 [2001] がある。
- 5 『奠都三十年』(博文館, 1898 年) 緒言 pp.3-4
- 6 『明治三十年史』 pp.22-24
- 7 『明治三十年史』 p.19
- 8 張朋園「廣智書局(1901-1915) - 維新派文化事業機構之一」(中央研究院近代史研究所『近代史研究所集刊』第二期, 1971 年)によれば, 広智書局が刊行した翻訳書の類別と点数は次のようになる。総類 7, 政治類 65, 法律類 4, 経済類 3, 財政類 6, 社会学類 9, 哲学類 9, 文学類 18, 歴史類 46, 地理類 40, 教育類 20, 教科書類 34, 衛生類 8, 語文類 15, 小説類 28。これを見ると, 政治, 歴史, 地理が多い。
- 9 「国民教育之精神, 莫急於本国歴史。日本人之以日本歴史為第一重要学科, 自無待言。但以華人而說東籍, 則此科甚為閑著。因其与数千年来世界之大勢, 毫無關係也。故我輩讀日本史, 第一義, 欲求知其近今之進歩, 則明治史為最要。第二義, 欲求知其所以得進歩之由, 則幕末史亦在所當讀。若前乎此者, 則雖闕之可也。今著録其最有名者數種。」(梁啓超「東籍月旦」『欽冰室文集之四』(『欽冰室合集』1) p.101
- 10 「太陽臨時増刊有奠都三十年一書, 其中有一種, 題明治三十年史者, 内分學術思想史, 政治史, 軍政史, 外交史, 財政史, 司法史, 宗教史, 教育史, 文学史, 交通史, 産業史, 風俗史等十二編, 由一時名士分門編輯。実近史中之最適於我学界者也。上海広智書局有訳本。改題日本維新三十年史。」(梁啓超「東籍月旦」『欽冰室文集之四』(『欽冰室合集』1) p.102
- 11 羅普に関する資料は, 百度百科「羅普」, 狭間直樹「初期アジア主義についての史

- 的考察(6)第五章 東亜会と同文会(『東亜』415号, 2002年)を参照した。
- 12 早稲田大学史料編纂所『早稲田大学百年史』第一巻(1982年, 早稲田大学出版部) p.925
 - 13 趙必振に関する資料は, 百度百科「趙必振」, 島田度次編訳『梁啓超年譜長編』第一巻(岩波書店, 2004年)372頁, 清水稔「湖南への社会主義思想伝播に関する一考察」(『仏教大学総合研究所紀要』3号, 1996年)を参考にした。
 - 14 羅普訳『日本維新三十年史』(広智書局, 1902年)序
 - 15 筆者は現在, これが梁啓超の著作のどの部分からものものかは確認できていない。
 - 16 趙必振は田口卯吉を田口久松と記す。
 - 17 羅普訳『日本維新三十年史』(広智書局, 1902年)例言
 - 18 『飲冰室文集』第一冊(『飲冰室合集』1, 中華書局, 1989年) p.1
 - 19 「去年初版未及数月, 即已售罄。可知此書, 為海内学界所歡迎矣。」(『日本維新三十年史』卷一「注意」)
 - 20 「近査, 有無恥之徒, 竟將此書翻刻, 任意刪改意圖射利, 故本局特加方印為記, 以便購書者易於辨認焉。」(同上)
 - 21 胡適「四十自述」(歐陽哲生編『胡適文集』卷1, 北京大學出版社, 1998年) p.67。竹田晃「胡適における啓蒙思想の形成: 伝記資料にもとづいて」(東京大学文学部中国文学研究室編『近代中国の思想と文学』, 大安, 1967年) pp.150-151
 - 22 崔起榮「言論의 救国闘争」(鄭晋錫, 崔起榮『新編韓国史46 新文化運動Ⅱ』, 国史編纂委員会, 2002年) p.84。このほか朝鮮と梁啓超との関係についての論文にはチェ・ヒョンウク [2009] がある。
 - 23 皇城新聞は, 朝鮮の大韓帝国時代, 1898年(光武2)から1910年(隆熙4)まで, 独立協会員である南宮楨, 羅寿淵, 柳瑾らにより, 『大韓皇城新聞』の版權を受けて発刊された新聞である。日刊紙でハングルと漢文の混合体。

＜資料1＞『明治三十年史』原文翻訳構成対照表

日本語 『明治三十年史』		中国語訳 訳者：羅普 『日本維新三十年史』		韓国語訳：皇城新聞 訳者：不明 『日本維新三十年史』	
1898年（明治31）		1902年（光緒28）		1906年（光武10）	
編名（著者）	頁	編名	巻頁	編名	通算回（掲載月日）
—	—	序（趙必振）	巻1 2-5	—	—
—	—	例言	6-7	—	—
—	—	目録	8-21	—	—
—	—	—	—	歴史宜読	1（0430）
第1編 総論 明治思想の変遷 （高山林次郎）	1-24	学術思想史	22-45	学術編	1（0430） -17（0518）
第2編 政治 （鳥谷部銑太郎）	24-50	政治史	46-83	政治編	18（0519）
第3編 軍事 （奥村信太郎）	50-102	軍政史	巻2 1-80	軍政編	46（0621） -89（0811）
第4編 外交 （松井広吉）	103-141	外交史	81-147	外交編	90（0813） -131（1002）
第5編 財政 （森一兵）	142-170	財政史	巻3 1-50	財政史	132（1004） -159（1106）
第6編 司法 （宮川大寿）	171-181	司法史	51-68	司法史	160（1107） -170（1119）
第7編 宗教 （姉崎正治）	181-214	宗教史	69-104	宗教史	171（1120） -193（1215）
第8編 教育 （長谷川誠也）	215-238	教育史	巻4 1-26	教育史	194（1217） -206（1231） *途中で終了
第9編 文学 （柳井録太郎）	238-244	文学史	27-36	—	—
第10編 交通 （坪谷善四郎）	245-275	交通史	37-97	—	—
第11編 産業 （塩島仁吉）	276-310	産業史	巻5 1-88	—	—
第12編 社会 （岸上操）	310-330	風俗史	89-102	—	—
附録 明治三十年間 国勢一覽（伊東祐 毅）	1-20	三十年間國勢進歩表	巻6 1-92	—	—

＜資料 2＞ 『明治三十年史』 原文翻訳冒頭部対照表

日本語	中国語訳	韓国語訳
第一編 総論 文學士 高山林次郎 明治思想の変遷	第一編 學術思想史	第一回 學術篇
明治初年以来三十年間に於ける最近の歴史を述ぶるに先ちて、それが根柢となれる國民思想の推移を尋ねむに、	有學述而，後有思想，有思想而，後有事業，一人如是，一国亦然， 故国家之治蹟，實國民學述之反射，而其思想之外表也，日本三十年來，銳意維新著著進步文章制度，爛然足觀，然迹其致此之由，自有一暗潮，流左右於其間，論世者，苟深觀而有得焉，則以求其一切進步之原，若網在綱矣	學述이 有ㅎ.ㄴ 然後에 思想이 生ㅎ.고 思想이 生ㅎ.ㄴ 然後에 事業을 成ㅎ.ㄴ.니 一人만 如是ㅎ.ㄴ 入분 아니라 一国도 亦然ㅎ.니 故로 国家의 治蹟은 實로 國民學術의 反射오 學術思想의 意表라 日本이 三十年以來로 維新에 銳意ㅎ.야 着着히 進步ㅎ.야 文章制度가 爛然足일ㅅ.ㅣ 其致此ㅎ.ㄴ 理由를 推究ㅎ.면 一派暗潮가 其間에 左右ㅎ.ㄴ인 則論世者ㅣ 眞실로 深觀有得이면 一切進步의 原因을 求ㅎ.ㄴ이 若網在綱矣이로다
そも—維新の當時にありては、 幕府仆れて王政古に復へりたれども、未だ然るべき政躰だに定まらず、 嘉永このかた一國の怖れとなりし外國の事情も定かに知る由もなく、尊王討幕の余焰は未だ志士の胸に消えざれども、 誰ありて國論の向ふ所を一にし、萬邦對峙の中に我國民に千万年の進路を示めせしものなし。	當幕府帰權，王政復古，革命之功，聊云就緒，經國之猷曾未得休， 尊攘余焰，猶然志士不胸，歐美外情未破嘉(嘉永)安(安政)之夢， 問誰能指定，國論之方針，於列國並立競爭激烈之中，示國民以千萬年之進路乎，	幕府가 帰權ㅎ.고 王政이 復古ㅎ.ㄴ 時를 當ㅎ.야 革命의 功이 少可就緒ㅎ.앗다 云ㅎ.ㄴ지나 經國의 宏猷가 猶未得休ㅎ.야 尊攘의 余焰이 志士의 腔血을 煎熬케ㅎ.앗도다 此時에 欧州의 外情이 嘉永과 安政의 迷夢을 未破ㅎ.앗신 則誰가 能히 國論의 方針을 指定ㅎ.야 列國이 競爭激烈ㅎ.ㄴ 中에 國民進步의 永遠ㅎ.ㄴ 路를 引導ㅎ.리요